

無限 綺譚

語り得るものを語るためにではなく
語りえないものの存在を知るために語る

高松伸

Interview with Shin TAKAMATSU
「Wording Architecture for the Ineffable」

時代

——高松先生は学生時代、どのようなものから影響を受けられたのでしょうか。

当然のことながら時代はどのような断面で切って表現するかによって異なります。とはいえ私の学生時代は、どこを切断しても学生運動の時代です。60年安保以後、学生達が様々な運動を継続している中で、東大の医学部における講座制の問題が露呈し始めたことが契機となりいわゆる東大紛争が始まりました。その影響をまともに受けるかたちで京大でも紛争に火がつくことになったわけです。その運動の急激な高まりに、当時の様々な社会問題、即ち「60年安保」や「成田空港問題」「公害問題」などが絡む中で、学生達は、端的に言うならば、「何が人々の自由を奪っているのか」という根源的な疑問に直面することになったわけです。そしてそのような裸の問いかけに対する答えを求めて、20代の若者達が、これ以上ないほど無防備に、そしてこれ以上ないほど直截かつ苛烈に社会に立ち向かい始めたわけです。私が山陰の片田舎からひょっこり出てきて、いきなりそのど真ん中に放り込まれたのはまさにそのような状況でした。従って私の学生生活は、そんな学生達が、先輩達がいったい何を考え、何を求めているのだらうということを知りたくなくてという、一種の焦燥感とともに始まることになったと言えます。書物に関して言うならば、建築の世界とはおよそ関係がない書物……実はこれは全くの間違いであることを後日知ることになるのですが……マルクスの「資本論」を手にとることから始まりました。もとよりマルクス、エンゲルスの書は当時の学生運動のバイブルであったわけです。つまるところ、そのような五里霧中の帳の中で、手当たり次第に関連書を乱読し、時に生半可な知識をものともせず先輩達の議論に乱入し、時に「自主講座」と呼ばれた学生主催の講義に割り込む日々の中で、私の中でいくつかの疑問がわだかまり始めました。たとえば「人は如何に個人の自由を守りつつ、社会制度、即ち一定の秩序を構築し得るか」。たとえば「自由を保証し、かつ管理することを可能にするシステムは如何なるシステムか」。たとえば「労働とは一体何か」……。そんなわだかまりのままに、私も極く極く自然に街頭に出るようになったわけです。当然のことながら路上から見る風景は、京都大学といういわば一種の聖域の中からのぞき見る風景とは全く異なるものでありまして、その路上を埋めつくし躍動する人の渦は、全国様々な大学の学生達によって巻き起こされたものでした。大学という組織に属して間もない私は、その渦の中で出会う同世代の若者達との議論や対話や、時には口論としか言いようのない混沌の中から、少しずつ様々な知識や新たな感受性を学び取り始めたように記憶しています。と同時にそれは、講義室で学ぶ知識や身につける感性とはおよそ異なるものであり（もとより講義そのものが開かれていなかったわけですが……）、言うならばそれは、雪崩を打って直接的に頭脳を襲うなにかであったと言って良いでしょう。言葉と言うものが物理的な実体を伴うほどのかたちで、なんの前触れもなく私の前に立ち現れ始めたのはそのような時でした。その当時、私が最も影響を受けたと言って良い若者がいました。彼は同志社大学の学生運動のリーダーのひとりで、常にデモ隊の前線で機動隊と捨て身で渡り合うような猛者でしたが、その彼が肌身離さず一冊の本を身につけていました。どのような状況下であろうとその一冊を読み耽っている姿を時折り目にして、その本のタイトルを尋ねたことから彼との交友がはじ

まりました。その一冊とは、他ならぬジグムント・フロイトの「精神分析入門」です。もとよりフロイトはマルクスとは異なるかたちで、人間の自律性、もっと言うならば個人の自由という概念を批判した訳ですが、その同志社の彼は「このバイブルの中にこそ究極の自由が存在する」と断言して憚りませんでした。

ともあれ、時たま街頭で出会うその彼との言葉に満ち満ちた時間が、私を避け難く現在へと連続する私に変えていったと言って良いと思います。ちなみに当時は、そのような渦に身を投じる若者達のひとりひとりが、自らのバイブルを持っていました。ある意味、圧力釜の中を闇雲に動き廻っているような生活の中で、ひとりひとりの若者が、およそ問題以外存在していないかのような社会において、「如何に生きるべきか」という身も凍るような「愚問」に立ち塞がれて、藁をも掴むように手にしたのが、そのような先人達の言葉だったのです。つまるところ、智恵や知識は自分の手で驚掴みするしかない。かつ、そのようにして貪るようにして身につけた知識こそ、他でもない自らが寄って立つべき小さな拠点であり、ある意味、他の誰のものでもない、誰とも決して共有することの叶わぬ、小さくはあるが、しかしながら不動のその拠点に立つことの矜持が、ひとりひとりの若者を、身体という唯一の武器によって無媒介的に社会を批判するという行動に向かわしめたと言えるでしょう。従って、そういう意味では、当時ひと括りに「学生運動」として片づけられていたその運動体に身を置いた若者は、実はひとりひとりが実に孤独であったと言えるかもしれません。何かを学ぶことを自ら決める限り、どのように生きるかを自ら決めようとする限り、その孤独を避けることは不可能であること。それを知ることが私の学生時代の始まりでもあったように思います。

ところで、ある特定の問題に端を発したところの「制度」「組織」「権威」への率直な問いかけが、やがて巷を席卷するようになった「異議申し立て」や「解体」という言葉が象徴するように、闇雲な否定の連鎖へと膨張する過程で、ある種の自己撞着的な矛盾に不可避免的に膠着するようになったことについて、ここで少し言及しておく必要があるでしょう。その矛盾を端的に言い表すために、ロラン・バルトの次の言葉を引用するに及くはありません。

「自分自身が操作のシステムの一部を成しているというのに、誰がその操作を告発するというのか」。この言葉を誤解を恐れずに意識するならば、「社会を形作っている張本人は他ならぬ我々であり、その我々が社会を批判することが果たして理に叶っているのか」ということになるでしょう。即ち、身体という斧を振り上げて社会システムを攻撃せんとした若者達は、実はその刃を自分達にむけて振り下ろそうとしていたことを否応なく知ることになった訳です。而して、もはや自らに異議を申し上げる以外にない。「自己批判」という言葉が、どこからともなく、まさに同時多発的に生まれ、若者達の思考がその出口の無いスパイラルに呑み込まれていくことになったのは、ある意味当然の成り行きだったと言えるでしょう。時代が悲劇的な様相を帯び始めたのはその頃からです。ついにはあるひとつの運動組織体において、当のその組織が個人に「自己批判」を強要し、「肅正」へと至る事態まで起きるようになったわけです。

学生運動が雪崩を打ったように急激に終息を迎え、脱力感だけが漂うようになったのはその頃のことです。ところで、全国で学生達による異議申し立てが噴出する以前に私達建築学徒を魅了していたのは、他ならぬ「メタボリズム」の思想でした。黒川紀章による「代謝建築論」や菊竹清訓の「か・かた・かたち」などの著書を通じて、社会は直線的に限り

無く発展し、建築の未来もまた可能性に満ち満ちているという華やかな夢に、私たちはなんの躊躇も無く胸を弾ませていました。これに先達つ丹下健三の「東京計画」はもとより、菊竹清訓の「海上都市」や槇文彦の「ゴルジ構造体 [高密度都市]」などの、もはや実現間近であるかのごときプロジェクトの数々に将来の自分を重ねて見入ったものです。ところが学生達が路上に溢れ出し、そここの大学の建築学科にバリケードが出現するようになると、そのような建築を巡る様相が一変します。羽仁五郎の「都市の論理」による痛烈な社会批判を受け、原広司が「建築に何が可能か」を、そしてなによりも磯崎新が「建築の解体」を世に問うたのはそのような時です。ちなみに原広司はその有孔体理論によって、建築はオポチュミスティックなインフラストラクチャーなどではなく、単なるインタラクティブな情報装置とであると喝破し、ついには小さな住宅に「都市を埋蔵」する大プロジェクトを次々と発表するに至り、磯崎新は「見えない都市」計画によってアイロニカルな建築観と都市像を建築界に突きつけ、ついには「プロセスプランニング論」の実践を通じて、建築は単なる過程的存在であることを実証するに至ります。このふたりのリーダー達が先鞭をつけることになった一種の建築運動は、当然のことながら、当時の若者達を巻き込んだ社会状況と決して無縁ではありません。それはそれとして、何よりも重要なのは、このふたりのリーダー達が先陣を切ることになった一種の建築運動が、それまでは不文律として君臨し続けたところの、いわば「大文字の建築」に、言葉という武器を用いて介入し、腑分けし、解体し、そして再び言葉を用いて構築し、かつこれを臨床的にその都度実証するという、いわば文学的なまでの実践の重要性を、私達建築学徒に悉く示したということにあります。話を大巾に省略することになりますが、建築を巡る思考を病理的なまでに震撼せしめることになった、このいわば一種の建築的事件の衝撃は、その後のポストモダニズムや脱構築主義などの地殻的大変動を超えて、現在まで連綿とその余震が続いており、その後の三十数年間、私もまた絶え間なくその微震に揺られつつ建築をつくり続けた訳です。

学生の課題

——京都大学建築学科の最初の演習は、フランク・ロイド・ライトの落水荘や高松先生の建築を黙々と鉛筆で描く、いわば「業」のようなドローイングからはじまります。そこに込められた意味や意図をどのようにお考えでしょうか。

君たちは建築を考えるにあたり、まずは社会に言及する。ならば社会とは何か。それは差異による総体であると言ってよいでしょう。ならば差異とは何か。それは身体である。ひとりひとりの身体の違いが差異をかたちづくる。ドローイングはそれを知るための作業のひとつです。差異を知るためには同一性を極める以外にない。君達は「見本」を与えられ、見本のとおりに描くことを要求されます。鉛筆を削り、ままたらぬ手と身体を酷使して描こうとすればするほど、それぞれの紙の上に似て非なるものが表れることになり、それにつれて、君たちは君たち相互の差異を否応なく知ることになります。かつ、君たちは見本どおりには決して描けないということも痛いほど知る。その「……ない」こそがドローイン

グにおいては実に重要なのです。その「……ない」ことこそが君自身の差異を際立たせることになるからです。君たちが君たちの身体によって削り出すことになるその差異、おそらくその差異の認識は、君たちひとりひとりからそれ以後決して消えることはない。そうして君たちは社会を語るのです。

小さな間違い

バルトが「小さな歴史」という著書の中で「人間とは還元不可能な諸々の特性の無限の総体である」と言っています。もとより「制度」や「法」や「社会秩序」は十全に還元可能なシステムによって構築されています。従ってバルトは、人間をそのようなシステムによって制限することは基本的に間違いであるとしている。かつ、そのような「大きな間違い」を「小さな間違い」によって私たちに知らしめてあるのが文学や哲学や諸々の創造行為であると。ところで、その「小ささ」が実は極めて重要です。ここで思い出すのが原広司の「住宅に都市を埋蔵する」というあの戦闘的なマニフェストです。そのマニフェストに準じて原氏が提示した建築作品の数々は、まさに「大きな物語」を「小さな物語」によって批評しようとする創造活動以外のなにものでもないでしょう。バルトはさらに「創造活動は告発である」とも「革命は傍らにある」とも語っている。建築という「小ささ」と必然的に向き合うことになる私たちにとって、これは大きな勇気を与えてくれる言葉です。と同時に小さな間違いを間違い続ける勇気をも……。

言葉

——高松先生の創作に関して、「言葉」というものがどのような意味を持つとお考えでしょうか。

敢えて言うならば、学生時代に出会ったたった一つの短い言葉が、今でもかろうじて私が建築家であることを可能にしているのかもしれませんが。それは「言葉の限界が世界の限界である」という言葉です。ルートヴィヒ・ヴィットゲンシュタインの言葉です。芸術家や哲学者の仕事は、いわば極めて「微細な闘い」であり、この言葉はある意味、その微小さこそが大きな物語と対峙し得ることを示すような言葉なのですが、ともあれ、この鋭利な言葉が、建築に触れるより先にのっけから言葉に襲われることになってしまった私を、それ以降、見通しなど望むべくもなく、延々と続くことになる隘路に引きずり込んでしまったと言って良いでしょう。誤解を恐れずに言うならば、それは「言葉によって建築をつくる」と名付けられた狭隘な路です。創造が世界の限界を撓め、歪め、そして時に揺り動かすことであるならば、かつ建築の新しさが世界の限界のその微動する臨界にのみ出現し得るとするならば、そしてそのような営為に一生加担することを自らに課すならば、とりもなおさずなによりも建築を語らなければならない。おそらくそれは語り得ることを確認することではない。そうではなく、むしろそれは語りえないものを確認することなのではな

いか。不断に語りつくすことによる語りえないものの反力に乗じてこそ世界の限界に建築を投企することではないか……。そのような考えに取り憑かれてしまった私が今でもここにいるわけです。

ドローイング

——高松先生にとってのドローイングとは如何なるものなのでしょうか。

おそらく「語りつくすこと」とどこか似ています。いわば「身体によって語りつくす」。建築や空間には独自の様々な属性が備わっています。そのいくつかを身体と言う媒体、もっと言うならば道具によって語りつくすこと。「深度」「濃度」「密度」「輝度」「硬度」「明度」などの属性を、身体の労働を通じて語りつくすこと。身体によって描きつくせない、その限界に建築の出現を見るために。それが私にとってのスケッチやドローイングです。

建築

——高松先生自身は建築をつくるという行為において、どのような志向を持って設計をされているのでしょうか。

これもまたバルトの言葉になりますが、バルトは「言葉は限りなく貧しい」と言っています。かつ、その「貧しさ」こそが言葉のおよそ唯一の能力であり、それは意味を呼び寄せ、自らを満たす能力であると。そういう意味で言うならば、私は限りなく貧しい建築をつくらうと考え続けているのかもしれませんが。あらゆる事象が即座に意味にまみれてしまうことを避けることができない世界にあって、間断なく、というよりもむしろ際限なく意味を脱ぎ捨ててゆく能力を有する建築をつくらうと考え続けているのかもしれませんが。日々を言葉でくんで生き続けている私たちの傍らに、言葉を失ってしまうような生き方が存在し得るかもしれない。そのような生の出現を垣間目のあたりにするために。

建築家として

——建築を通して思索を続けてこられた高松先生は、建築家とはどのような存在であるべきだとお考えでしょうか。

先日、君たちに紹介してもらったロベール・ブレッソンの「シネマトグラフ覚書」は私にとって非常に刺激的でした。君たちの問いかけには、その「覚書」の中のいくつかを引用

する方がはるかに的確な答えになるかもしれません。ということで、君たちからもらったプレゼントの中から君たちへのプレゼントを探すことにしましょう。さて、彼はこう言っています。「違うものであるためのつねに変わらぬ方法」と。創造と普遍のダイナミズムに、優雅なほど簡潔なパラドックスで言及しています。彼はまた自らの職能についてこのように言っています。「(自分は) 演出家でもない、映画監督でもない。自分が映画を作っていることを忘れなさい」。つまり「(君は) 建築家ではない。建築をつくっていることを忘れなさい」と言われている訳ですね。

私にとっては目が醒めるほどエキサイティングな記述もありました。「シネマトグラフ、それは書くための方法である」。要するに、「言葉」なのですね。「言葉」以外のなものでもない。「正確さへの熱狂」という興味深い言葉もありました。これもまたパラドキシカルな言い方です。明らかにウィトゲンシュタインの先の言葉に通底しています。即ち、言葉が正確なものであるとしたら、その正確さの限界が正確であるべき世界の限界である。ゆえにその限界に介入するには、語りつくさねばならない。「熱狂」的に。そしてその先には圧倒的な沈黙が待ち受けている。ウィトゲンシュタインはこのように言います。「語り得ることは明瞭に語られ得るが、語りえないことについては沈黙せねばならない」そして「示すことができるものは、語るわけにはいかない」と。さて、最後に私たちにとってあまりにも当たり前で、あまりにも厳しいプレッソンの言葉を引用しておきましょう。「探すことなく見出すという戒律を実践すること」。

そして、私もまた最後にひと言だけ言い置くことにしましょう。ここまで度々「限界」について触れてきました。なぜならば、それは私が次のことをかろうじて信じ続けているからです。おそらく人は建築を通じて、建築とともに、そして建築によって、生を「無限」に生きることができる……と。おそらくそれが建築をつくることのお小さな希望です。小さくはあるが、小さいが故の希望なのです。

2012年9月10日、高松伸建築設計事務所にて